

## 追悼 三沢光晴の思い出 “楠田行展”

6月13日、プロレスリング・ノア「サザン・ナビゲーション09」広島大会での試合中、斎藤明俊が放ったバックドロップで三沢光晴はリング上で亡くなった。46歳という若さだった。それから1ヶ月以上たった今でも何故か信じられない。ボカんとした感覚だ。キー局の地上波で中継をやっていないこともあるのだが、三沢のリングでの事故死というのが、彼のイメージと全く合わないからだろう。彼ほど、相手の技を受けて受けて、対戦相手の魅力を引き出させてやるレスラーも数少ない。それほど、受身の上手さには定評があった。彼が元いた全日本プロレス。全日のプロレス中継で初めて観た彼の試合が思い出となって甦ってくる。非常に感動的な試合だった。今でも鮮明に焼きついている。

今から16年前の1993年7月29日に行われた「サマー・アクションシリーズ」の最終、日本武道館戦の中継。それまでは新日本プロレスの中継しか観戦したことのないボクだった。「だって馬場とこって地味やん。たぶん、恐らく、間違いなくつまらんやろな」。中学2年のヒネたガキの考えそんな思想。取り敢えず眠た目こすって見てみる。色白で緑色のロングタイツをつけたレスラーと黄色と黒のツートンカラーのロングタイツのロヒゲを生やしたレスラーのヘビー級のタイトルマッチ。三沢光晴VS川田利明の三冠統一ヘビー級選手権試合の中継だった。

試合序盤、互いに様子見しながら、川田が要所でローキックを繰り出す。それを受けて三沢得意のエルボーを返す。川田のボディスラムからのサッカーボールキック。苦痛と怒りに満ちた表情の三沢。三沢エルボー連打からのフライングリアット。リングから転げ落ちる川田。そこを目指してトップとセカンドロープの間から場外へ三沢が跳んだ。エルボースイシャーで川田の横面を捕らえる。試合時間が経過すると互いの打撃の攻防に重みが増してくる。三沢のウエイを乗せたエルボーは強烈だ。負けじと川田は得意の顔面蹴り。三沢の首根っこを捕まえリフティングするように何回も何回も叩き込む。そして、ジャンピングした状態で廻し蹴りが三沢のアゴに放たれた。その瞬間カメラのフラッシュが焚かれた。

中2のガキは試合開始15分で初めて観る全日本プロレスの高度な攻防に、それまでにない興奮に包まれていた。川田が放つ、きれいな弧を描く急角度バックドロップ。ドラゴンスープレックス。三沢が放つ、タイガードライバー。どれもこれも新日本プロレスでは一発出れば良い方。それでも彼等はまだ「カウント2」で相手の技をクリアするのだ。「いつ、どういふカタチで決着するんやろ」。奥歯をガタガタ震わせて、気付けば正座で見守る、午前2時の中坊。試合が動いたのは三沢が放ったジャーマンスープレックス。これは投げ捨て式のスープレックス。そして渾身のエルボーパット。川田がグシャと倒れこむ。ジャーマンの2発目。川田はカウント2で気力のクリア。三沢投げ捨てジャーマン3発目。まだ、追撃の手を緩めない三沢。フラフラとなった川田は力なく、三沢タイガーマスク時代からのフェイスバット、タイガースープレックスの前にカウント3のゴングを聞く。25分以上の試合が終わると手に汗をかいていた。鳥肌が立っていた。「ナメてたな」とボツリ。本当に感動していた。本当に凄いものを見せられてしまったと思ったボクは、反省し全日本プロレスファンにあっさりと転向した。

激闘を繰り返した為、ケガや疲労が蓄積された結果が今回の事故かもしれない。しかし、生前三沢が雑誌に語った言葉が思い返される。自分もプロレスが好きでレスラーになったが、(以前の)リングアウトでの決着にガッカリしてきた。だから自分たちのプロレスは激しい。それを通じて、「プロレスがここまでくるのにどれだけ大変だったのか、それを知ってほしい」と。感動的な言葉だ。賛否あるだろうがこれからもボクはプロレスを支持していきたいと思う。ボクは本当に運が良かった。あの三冠戦に出逢えて。高校で空手に通うことになったきっかけも三沢と川田の試合。彼を思い返す度、入場テーマ「スバルタンX」とともに三冠戦を思い出すだろう。三沢さん、本当にたくさん思い出をありがとうございました。誠

## 5年後の、7月の現状 “kengo matsui”

collectiveにとって5回目のアニバーサリー・パーティがやってきました。さすがに5年後のイメージなんて、はじめた当初は何もなかったわけで、あっさりとしたものです。変わらないのは、collectiveが日常と続きのままの「平熱/微熱の祝祭空間」であることや、グラスで飲める冷たいビールにあたたかい食事、ということくらいでしょうか。

あらゆる世界の激動も素知らぬ顔で、われわれが相変わらずの調子でレコードに針を落としたり、エフェクターのつまみをひねったりしているのは、おそらくは、意識的か無意識的かわかりませんが、今年のゴールデンウィークに天に召されたソウルシンガー(彼をロックンローラーと呼ぶか、ブルーズマンと呼ぶか、それはおまかせしますが)のあの歌みたいな、「うまく言えたことがない」気持ちによって駆動されているからなのかもしれません。

ベイエリアから、リバプールから、ニューヨークから、デトロイトから、ベルリンから、東京から、そして大阪から、このアンテナがキャッチしたナンバーを、彼女が教科書上げてるときに空に吐けてったホットなメッセージを、君の知らないメロディを、聞いたことのないヒット曲を、今夜集う皆さんと分かち合おうという密かな気持ち。

メンバー全員にとって、少なくともこれだけは嘘偽りのない気持ちであることを、あえて強調してから述べさせていただきますが、皆さんの長く、力強いサポートにいつもcollectiveは助けられています。心から感謝いたします。記念の夜は、あえて飾らず、コアメンバーによるホストです。彼らのクオリティについては皆さんに説明するだけ野暮でしょう。今宵は、天神祭の喧噪とは正反対の、レイドバックした祝祭のグルーヴに酔いましょう。まだ、我々のパーティは続きます。おそらく次回には新たなメンバーをご紹介できることでしよう。

### information

今回のプレス・コレクティブでは、「5周年記念」ということで、コレクティブと関わりの深い仲間にお気に入りのアルバム音源を5枚セレクトしてもらい、別冊付録としてディスクガイドを作り上げました。コレクティブらしいディスクガイドに思わずニンマリです。皆さんは誰のセレクトが好みだったでしょうか？

さて、次回コレクティブは2009年の晩秋を予定しています。詳細はホームページでご確認下さい。

[http://www.geocities.jp/collective\\_web/](http://www.geocities.jp/collective_web/)

### 5周年記念 別冊付録

### コレクティブの仲間たちによる ディスクガイド30

## 集まるつながる “yu”

collectiveも5周年を迎えてつくづく年月の経過の早さを感じながら、このパーティーってなんなのか、その根源的な部分を考えています。

大学時代の先輩であり、発起人であるKengo氏からホームパーティーみたいなものをやりたいと、その思いを聞いたときには、まだ私は立ち上げに協力する余裕もなく、どんなパーティーをやるか、メンバーとして経過をE-mailのやりとりで確認するのが精一杯でした。

ダンスミュージックを軸にしながらも爆音で曲を流さず、電車で帰れるパーティー。周りでこういうやり方をしているパーティーがなかったので、自分の楽しみ方をうまく見つけるまで時間がかかりました。

私はcollectiveが始まって就職するまでは、レコードを買ったり、深夜のパーティーへ行くことから自分を遠ざけていましたが、collectiveは足を運ぶごとに生活の中で自然と共存できる存在となっていました。気づけば、春夏秋冬の節目節目でフライヤーに切手が貼られて送られてくるメンバーのメッセージ。先の見えない毎日にとってどれほど後押しになったか……。

正式にメンバーに加えてもらってからも、毎回、毎回がcollective以外の何ものでもないんだけど、それでいて、この場所を通してこれほど色んな人に出会えたのは何なのだろう。回を重ねるごとに内輪が内輪であって内輪をこえていくような不思議な感覚をこのパーティーで感じられるようになってきました。「みんながみんな違ってそれぞれが面白い」なんていうのはよくある言い回しかもしれませんが、色んな人が「ぐしゃっ」と集まることで生まれるエネルギーというのがこのパーティーを転がしているんだと思うんです。

仕事柄、地縁による人の結びつきはその年齢層が低ければ低いほど希薄になっていく傾向があることを痛いほど肌で感じている今日この頃ですが、一方で何か楽しめるきっかけを見つければシンプルな理由で集まれるということも感じ始めています。

これからも人々の生活はますます個人的になっていくと思いますが、人間の心として根源的な「集まること」「つながること」は求められ続けていくだろうとも思っています。

私は紛れもなく、その集まりたい場所の一つがcollectiveで、皆さんにとってもそうであってほしいなと思います。

## 極私的ハウス囃 “itaru wakui”

「捨てる技術」の巻

いやあ〜暑いですネェ……。暑さに弱いワタクシはすでにマイッてしまっております。みなさんは体調管理万全ですか？ くれぐれもご自愛のほどを。

毎度おなじみのこの駄文。今回極私的にハウス・ミュージックに関する話題をと思ったのですが、趣向を変えて本をご紹介します。さてその本、書名を『明日に向かって捨てる!!——BOSEの脱アーカイブ宣言』といいまして、著者はBOSE氏(スチャダラパー)です。この本、もともとは「ほぼ日刊イトイ新聞」に掲載されていたもので、加筆のうえ書籍として刊行されました。

みなさんも部屋の片付けにはお困りではありませんか？ こんなモノをなぜ買ったのか、いつ買ったのか、果たしてコイツにもう一度番はあるのかといった疑問——。部屋にたまったモノはアーカイブと化し、部屋を見まわすたびに深く長い溜め息をついてしまうことはありませんか？

かくいうワタクシもいつのまにやら増殖している本・雑誌・レコード・CD・フリーペーパーetc.を見るにつけ、やり場の無いやるせなさを感じる事が多々あります。ワタクシは買い物に苦手で大量のモノを前にすると急に購買意欲が失せたり、欲しいなど思っても時間をかけて熟考してから買う、そういうタイプの人間だと自認しているのですが、それと片付けとはどうやらまた別の話しなのかもしれません。

さて、ではBOSE氏はどうか。ドライにばっさりガシガシ捨てまくるのかといえば、全然そんなコトはありません。いや、そんな潔さなど一切ありません。むしろ捨てないのはなぜかをあーだこーだと考えては捨てることに逡巡を続けます。この本、「名は体を表す」(なはたいをあらわす)という諺のように、BOSE氏がいかに自らの部屋の片付けに邁進するかを綴った壮大なる片付けドキュメンタリーというわけではなく、「!!」には氏の決意がこれでもかといわんばかりに力強く込められているものの、決意のごとく驚くべき整理整頓を完遂するわけでもないのです。

つまり、モノが溜まるとはどういうことか、なぜ今ここにはコレがあるのかを語り尽くす「人生のモノ語り本」なのです。捨てる理由、買った理由がいちいち面白いので、ぜひこの本を読んであなたも身の回りのモノをじっくり見渡して見て下さい。ついでに、この本を読んでいろいろ思い巡らせた後には現代社会におけるリサイクルの存在意義をマヌケに語り尽くした松本哉『貧乏人の逆襲』を読まれることをオススメします。まとまりのない紹介で失礼しました。思考回路が働かないのは暑さが悪いのデス。というわけで最終的にはハウスに関する駄文とあいなりましたでしょうか。悪しからず。

BOSE, 2008, 『明日に向かって捨てる!!』(双葉社)  
松本哉, 2008, 『貧乏人の逆襲 —タダで生きる方法—』(筑摩書房)



## マイケル・ジャクソン再考 “tawaki”

2009年6月25日未明、キング・オブ・ポップことマイケル・ジャクソンが死去。50年という短かくも濃密な人生に幕を下ろしました。

僕はマイケルの訃報に驚嘆しつつも、それを違和感無く受け入れることができました。よく考えてみてください。彼が高齢者になり介護を受けて生きていく姿なんて想像できないでしょう。マイケルは容姿やライフスタイルが常軌を逸して、同じ人間とは思えないところがありますよね。でも、これこそが「スーパースター」たる所以でしょう。

誰もが知っているマイケルですが、ここでは個人的な思いを綴ります。僕は中学1年だった1990年代初頭、背伸びをして洋楽に初めてトライしました。その記念すべき1枚がマイケルの「Dangerous」というアルバムでした。ニュージャックスウィングのオリジネーターとして知られるデヴィッド・ライリーが楽曲の約半数をプロデュースしたこのアルバムは、それまで邦楽しか知らなかった僕にとっては、素晴らしいポップであると同時に極めてエッジな作品でした。

「Dangerous」をすっかり気に入った僕は、2つの方向からマイケルの作品を追って行きました。1つは「Dangerous」からカットされたシングルのリミックス・バージョンのチェック。リミックスの大半はハウス系のものでしたが、いざこれにせよ、僕はマイケル作品を通じてクラブミュージックの一端を知ることになりました。そしてもう1つが旧譜のチェック。マイケルの作品は過去に遡るほど「ソウル色」が濃厚になってくるので、マイケルの旧譜をチェックすることは、意図せずしてソウルミュージックに触れることになったのです。これらの作業は今思えば僕の音楽の趣向を形成するルーツだったのかもかもしれません。マイケルは僕が深く音楽を聴くようになるきっかけを作ってくれたアーティストでしたが、当時感じた圧倒的な魅力は今も変わりません。このcollectiveでも結構な頻度でマイケルの楽曲をかけています。

マイケルは超絶的なダンステクニックや、手の込んだプロモーションビデオが象徴するように、オーディエンスの「視覚」に強くうったえかけるアーティストとして認識されがちです。もちろんこのことは同意すべきことなのですが、忘れてはならないのはマイケルの楽曲の良さです。ジャクソンファブ時代〜ソロ初期時代にかけての楽曲もエバー・グリーンですが、collective的には70年代後期から80年代初頭にかけてクインシー・ジョーンズの指揮のもとに作られた「Off The Wall」と「Thriller」の楽曲をがーっしりです。この2枚のアルバムはマイケルの人気絶頂期のアルバムですが、意外なほど今の時代の気分とフィットしたディスコ〜ポップ〜ギタールな曲が揃っています。以下にオススメ曲をピックアップしたので、ご自宅に戻ってからは是非チェックしてください。マイケルが頼まれなメロウでアーバンなソウル・シンガーだということを再発見するはず。合掌。

「Off The Wall」収録曲

- Don't Stop 'Til You Get Enough
- Rock With You
- Off The Wall
- I Can't Help It
- It's The Falling in love



「Thriller」収録曲

- Wanna Be Startin' Somethin'
- Baby Be Mine
- Thriller
- Billie Jean
- Human Nature
- P.Y.T. (Pretty Young Thing)



mitsuki

剣菱:家飲みするとき、よく聴く5枚

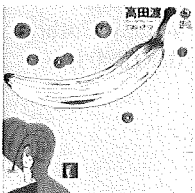
・浅草六九三  
「浅草六九三の世界」LP  
(エムプレスレコード/1978)

PICTURE NOT AVAILABLE

・野坂昭如  
「不条理の唄」  
(ELEC RECORDS/1973)



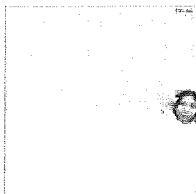
・高田渡  
「ごあいさつ」  
(キングレコード/1971)



・吐痰唾舐汰伽藍沙箱  
「溶け出したガラス箱」  
(URC/1970)



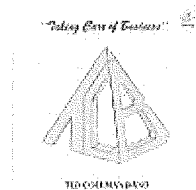
・金延幸子  
「み空」  
(URC/1972)



sato & nakano

世界の中心で愛を叫べない人のための、  
リージョンコード入り都会派音楽by田中康夫

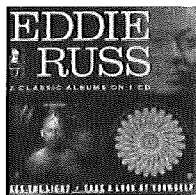
・Ted Coleman Band  
「Taking Care Of Business」  
(P-Vine/1980)



・吉田美奈子  
「愛は思うまま」  
(RCA/1978)



・Eddie Russ  
「See The Light/  
Take A Look At Yourself」  
(Monument/1975・1978)



・Ivan Lins  
「Somos Todos Iguais Nesta Noite」  
(EMI/1977)



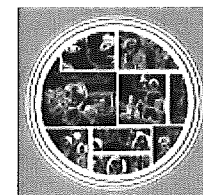
・Maze featuring Frankie Beverly  
「We Are One」  
(Capitol/1983)



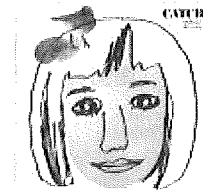
masunaga-san

オススメの5枚

・Numbr Girl  
「SCHOOL GIRL BYE BYE」  
( K.O.G.A Records/1999)



・小谷美紗子  
「CATCH」  
(HIPLAND MUSIC/2006)



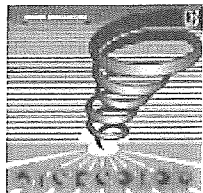
・John Cameron Mitchel  
「Hedwig And The Angry Inch」  
(カッティング・エッジ/2001)



・V.A.  
「Chopin 100(シヨパン名曲100)」  
(Victor Entertainment/2006)



・Stereo Lab  
「Emperor Tomato Ketchup」  
(Duophonic /1996)



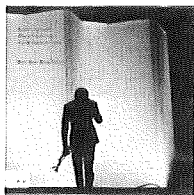
**buri & mori**

土曜の昼下がりがりぐらいダラダラさせて

•Tania Maria  
「Viva Maria」  
(Concord Jazz/2001)



•Keith Jarrett Trio  
「Bye Bye Black Bird」  
(ECM/1991)



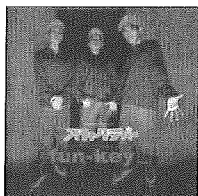
•空気公団  
「空気公団作品集」  
(パッドニュース/2007)



•Jackie Moore  
「Sweet Charie Babe」  
(Atlantic/1973)



•スチャダラパー  
「Fun-Key LP」  
(ワーナー/1998)



**murakami-san**

入眠時の、または、宇宙旅行時の音楽

•Yo La Tengo  
「Summer Sun」  
(Matador/2003)



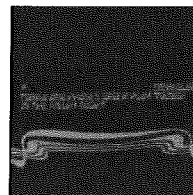
•Sonic Youth  
「Experimental Jet Set, Trash  
& No Star」  
(DGC/1994)



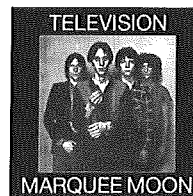
•Momus  
「Voyager」  
(Creation/1992)



•Stereo Lab  
「Cobra And Phases Group Play  
Voltage In The Milky Night」  
(Duophonic/1999)



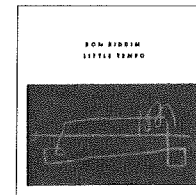
•Television  
「Marquee Moon」  
(Elektra/1977)



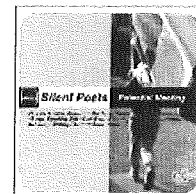
**tawaki**

高品質国産清涼DUB

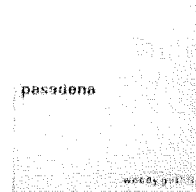
•Little Tempo  
「Ron Riddim」  
(カッティング・エッジ/1998)



•Silent Poets  
「Potential Meeting」  
(トイズ・ファクトリー/1993)



•Pasadena  
「Woody Guthrie」  
(Mao/2004)



•Fishmans  
「空中キャンプ」  
(ポリドール/1996)



•Subliminal Calm  
「Subliminal Calm」  
(ビクター/1992)

